

健康文化

ジブチの医療事情 (1)

伊藤 まり子

私は2000年4月から12月まで、あるNGOの派遣医師としてジブチ共和国の産婦人科病院に勤務した。ジブチ共和国はアフリカの角と呼ばれるアフリカ東北部に位置している。北はエリトリア、西はエチオピア、南はソマリアに接しており、紅海を隔ててイエメンを臨む位置にある。国土は四国の約1.2倍という小さな国で人口は74万人。住民の50%はソマリア系イッサ族、40%はエチオピア系アッフアール族である。公用語はアラビア語とフランス語。1862年にフランスの海外領土として軍事基地がおかれ、1977年に独立した。92%の人はイスラム教を信仰している。気温は5月～9月は平均気温35℃、最高気温は40℃を超えとても暑い。10月～4月までは平均気温25℃で比較的涼しい。年間雨量は100～170mmと少ない。国土の大部分が砂漠であるため農業は低迷しており、主たる収入源は鉄道、港湾、駐留フランス軍(約4000人)が落とす金である。

フランス人が多いためか物価は高い。市内中心部には外国人向けのスーパーマーケットがある。店の中に一步入るとそこはフランスである。フランスから空輸された野菜、肉などの食材が並びチーズの量り売りのコーナーもある。値段は当然フランス国内より高くなっているが、そのことを全く気にしていないかのようにフランス人はたくさん買い物をしている。

一方ジブチの庶民は週に1回、水曜日にエチオピアから野菜がやってくるので、それに頼って生活をしている。新鮮な野菜を手に入れたければ水曜日に市場に行き野菜、果物を買う。こちらはそんなに高くはないがトラック、汽車に揺られて傷んでいる野菜も多いので慎重に選ばなければいけない。旧フランス領らしくフランスパンが庶民にも浸透していて、市内には乳母車の大きさの木の箱にフランスパンを入れて、ラッパを鳴らしながら売り歩いている人たちを見かける。1本20フランである。(1ドル=177ジブチフラン。1ドル120円とすると、1本は14円)安くておいしいので私は毎朝食べていた。

ジブチ共和国の首都はジブチ市で人口は35万人。市内にはペルティエ総合病院、ダルエルハナン病院(産婦人科専門病院)、結核専門病院、フランス軍病院

がある。外国人や裕福な人はフランス軍病院に行く。庶民はまず地域の保健所に行き、そこで看護婦（士）に診察、治療してもらい、それでもよくなるときは病院を受診する。ペルティエ総合病院では診察を受ける場合は3000フラン必要である。エコーは5000フランである。ダルエルハナン病院は当初は無料診療であったが、2000年8月から診察が200フラン、エコーは500フラン、分娩は1000フラン取ることになった。

ペルティエ総合病院の産婦人科にはフランス人医師2人、イラク人医師1人が勤務。他の科には中国人医師もいる。ジブチ国内には医科大学がないので医師になる場合はフランスなど海外へ行かなければならない。医師になっても戻ってくる人たちは少ないらしく、医師は外国人に頼っているようである。私が勤務したのはダルエルハナン病院でそこにはジブチ人医師1人が勤務していた。

ダルエルハナン病院は、リビア政府の援助で1985年にジブチ市内に建設された病院であるが、政治的理由により建設直後から閉鎖され1989年に再開した。

病院は2階建てで、1階には外来診察室、検査室、ファミリープランニング、レントゲン室、倉庫、台所、事務室等がある。検査室は2000年11月に使用開始されたが簡単な検査しかできない。レントゲン室、台所は使用不可能である。2階には病室、分娩室、手術室がある。病室は3人部屋8つ、大部屋1つからなり合計で40床のベッドがある。手術室には无影灯しかなく手術はできないので、手術が必要な患者は車で20分程のペルティエ総合病院に転送している。分娩室には分娩台が10台くらい並べてあるがその間にカーテンや仕切りはない。

ダルエルハナン病院は適切な管理がなされていなかったため、建物は老朽化し、設備不足になっていた。日本政府から草の根無償資金が提供され1999年12月から2000年3月末まで病院の修理が行われた。私は病院の修理が終了した後にジブチに到着した。初めて病院を訪れたときは修理直後で非常にきれいであった。壁は白く塗られ、3人部屋にはエアコンが設置され、寄付されたベッドが整然と並んでいた。しかし病院が再開後『こんなにも早く色々なものが壊れるのだろうか?』と思うほどのスピードで病院の中は変わっていった。

5月の初旬に大雨が降った。壁の隙間から雨漏りがする外来診察室から激しく降りしきる雨をながめていた。そのうちに看護婦が「雨漏りがするので見てほしい」とやってきた。2階に上がってみると、廊下、病室、分娩室は水浸しになっていた。分娩室に大きなポリバケツが置かれていたが、それもすぐに一杯になってしまうような早さで雨漏りがしていた。分娩室の天井を見ると取り付けられていた電灯のねじがゆるんだのか、落ちかかっている配線のみでつな

がって宙ぶらりんになっていた。私には為すすべもなく、雨が止んでから考えるしかなかった。道路は排水溝がなく、水はけも悪く雨水であふれていた。帰りはその中を車で送ってもらったが、まるで以前にテレビで見た洪水の災害地域のものであった。水たまりの中で車が止まったらどうしようと冷や冷やししながらも無事にアパートに着いた。雨は1日で上がったが雨水はなかなか引かなかった。私の住んでいるアパートの前のグラウンドは大きな池のようになり、完全に水が引くのに1週間以上かかった。

雨が上がった後、雨漏りの影響できれいに塗られていた壁のペンキが剥げはじめた。天井のファンが回らなくなったり、エアコンの周囲から水漏れがしたりした。入院患者が増えるにつれて病院内は汚れ、そしてなぜか病室のドアが傾きだした。日本ではドアが壊れるのは地震などの災害のときくらいと思っていたが、ここではドアの質が悪いのか、取り付け技術が悪いのか、患者がドアの扱い方をよく知らず力まかせに開け閉めするのが悪いのか、多くのドアの蝶番がとれて傾きだした。

病院には患者や患者家族が無制限に入ってくるので、床は土と埃だらけになった。時々無断で病棟内に入りベッドに寝ている人もいた。回診のときに看護婦に見つかり、まず外来に行くように言われていた。また家族が患者用の食事を持ってくるので、病室の中には食べ残しが散らばっていた。暑いところなのですぐに腐り悪臭を放ち、はえが食事やベビーにたかっていた。ベッドにシーツはなく、マットレスに布を敷いて寝る人もいるが、多くの人は分娩後血液で汚れた衣服のまま直接寝ていた。そのためマットレスは汚れ、患者の退院後もすぐにきれいに拭いてくれないので、新しかったマットレスも数ヶ月でボロボロになってしまった。分娩室にも床に血液がこびりついていて、病棟の廊下には猫が住みついていて廊下を走っていたり、分娩室に入り込み胎盤を食べていることもあった。

掃除をする人は一応いるのだが、座って看護婦たちとおしゃべりしている時間のほうが長いように見えた。外来診察室の掃除を頼んでも、週に1、2回してくれればいい方だった。外来で使った器具の洗浄を頼んでもそのままになっていることが多く、それにはえがたかった。帰る時にいつも殺虫剤をまいて帰るので朝はいいのだが、診察をしていると患者と一緒にえも入ってきて、いつの間にかはえを払いながら診察をしていた。

大金をかけて修理された病院だったが、現状維持どころか崩壊にむけてまっしぐらに進んでいるようだった。病院に来た厚生省のお役人が院内でたばこを

吸おうとして注意されていた。病院に対する考え方は役人でさえもこの程度なのである。病院の倉庫にはユニセフなどからの物品の寄付が雑然と放り込まれていた。リストなどは当然ない。日本では数百万円もする保育器もあった。本来の使用法はされずに、死産のベビーを入れるのに使っていたそうである。そして汚れて壊れて倉庫行きになったそう。日本人の感覚では寄付で新品のものをもらったらそれを大事に最後まで使う、と思うのだがここではそんな空気を感じたことは無かった。教育の程度なのか、民族性なのか、ものを大切にするという習慣がないようにみえた。新品のものをもらってもそれを使いこなす知識がないため正しく使われなかったり、力まかせに扱うためすぐに壊れていく。ものが無くなっても、そのうちに寄付が来るだろうからそれを待っていればいい、という安易に外国に依存する体質ができてしまっているように思えた。「これがあったら便利だろう」と送っても、それがなくても十分に生活していた人たちにとっては本当にありがたいのかどうか疑わしい。日本ではものを使いこなすだけのシステムも環境も当たり前のように整っているのだが、途上国では「日本ではこうなのに……」は全く通用しないのである。

ジブチでも援助物資が来ると贈呈式が行われ、テレビ、新聞で取り上げられる。私がいる間にもリビアから医療機器の寄付があり、日本の NGO からベッドシーツの寄付があった。日本政府の調査団から必要なものを聞かれたりもした。病院にシーツは必要だと一般の人は考えるだろうが、実際は洗濯のシステムが無ければ使えないのである。贈られたシーツは今も倉庫の片隅で眠っていることだろう。途上国への支援はもちろん大切である。途上国に対して物品やお金を送ることがあるが、送る側は送ったことで「支援をした」という満足感が得られる。送ったものは困っている人たちの所に届き、それを受け取った人たちは大事に使ってくれるだろうと思っている。しかし現実には必ずしもそうではないことがある。受け取った側の教育の程度、文化、習慣によってかなり違ってくる。送ったものが有効に使われるのも大事だが、安易に外国に頼らず自分たちの足で立つことを支援することも重要であると思う。私自身もユニセフに寄付をしているが、倉庫に長いこと入れられて古くなり捨てられていく援助物資を見ると悲しくなってしまう。しかし送らなければ貧しい人たちの所には絶対届かない。送り続ければ必要な人たちの所に少しでも届くだろうと願っている。(つづく)

(産婦人科医師)

参考文献：ジブチの沙漠緑化 100 景 東京農業大学出版会



病院外観



分娩室